The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	新入生の授業選択の情報源に関する研究 ： 大阪大学の教養教育科目を中心に
Author(s)	服部, 憲児
Citation	大阪大学大学教育実践センター紀要. 2012, 8, p. 9-16
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/12618
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『大阪大学大学教育実践センター紀要』第8号（2011），pp.9-16

【論　文】

新入生の授業選択の情報源に関する研究

― 大阪大学の教養教育科目を中心に ―

服部　憲児

Study on the Information Sources for Electing Courses of Studies in the First Grade: General Education in Osaka University

Kenji HATTORI

The purpose of this paper is to explore the information sources, which are utilized by freshmen in order to elect courses of studies in the first grade, and to study the information, which they need but cannot obtain, in case of Osaka University. The following results were obtained. First, many freshmen utilize information from "*Kurobus*," a booklet edited by some students, evaluating courses from the perspective of how easily students can pass an examination. The number of students taking a course is correlated with the rating received by the course in *Kurobus*. Second, however, most students use the syllabus, and some students consider information from their seniors. Thus, freshmen elect courses by combining information. Third, information that freshmen cannot easily obtain under the present condition are the "teacher's personality" and "teaching method." Such information will be provided in the "interactive syllabus," which is being developed in the Institute for Higher Education Research and Practice in Osaka University.

序

(1) 問題意識と課題設定

今日、大学における初年次教育の重要性が強調されている。これに関する書物も多数出版されており、実践・研究報告やFD講習会の類も多く行われている。さらには専門の学会（初年次教育学会）までも設立されて、その在り方が議論されている。

ここで、入学手続きから授業が始まるまでの間に新入生が行う一般的なことを考えてみよう。まずは、入学手続きと前後して、大学から送られてきた書類や資料に目を通すであろう。自宅外通学生の場合は下宿探しもある。4月の頭には入学式がある。直後に（場合によっては先に）オリエンテーション、大学によっては合宿もあるかもしれない。健康診断も行われる。授業を選択して履修登録を行い、そして授業開始を迎える。

大学の初年次生に関しては、これまでも高等教育論等の分野で注目されてきたし、研究テーマとしても取り上げられてきた。とりわけ初年次教育の重要性が強調されるようになった近年においてはそうである。そこでは新入生に対する授業の在り方、教育方法や指導方法、カリキュラム、導入教育、オリエンテーションの内容と在り方、入学前の事前教育、などが関心を集めている。

しかしながら不思議なことに、上に示した入学当初の一連の流れの中で、健康診断は別として大学の公式行事のうち授業選択・履修登録に関することだけは研究対象とされることが少ない。すなわち、初年次教育の重要性が謳われているが、授業選択や履修行動については研究上の死角となっているのである。

授業選択は高校と大学の大きな違いの1つである。実際に新入生が最初に頭を悩ますのは、この授業を選択して履修登録をする時であろう。初年次教育がその後の大学生活にとって重要であるとすれば、ここでどのような授業に出会うかは、その後の学習に影響を与えることになる。しかしながら、管見の限りでは高等教育論や大学教育論の分野では、これを中心的テーマに据えた研究は

ほとんど行われていない。

学生の授業選択自体に関しては、教育心理学などの分野を中心にいくらかの研究がなされている。平野眞は、学生が授業を選ぶ際の価値基準（「好み」）を分析し、学生により教授技術、単位認定、教員、授業内容など重視する事柄が異なることを明らかにしている[1]。しかしながら、仮想の授業を使って分析しているため、実際の選択行動に反映されるかは明らかでない。三宅幹子は大学生の授業選択態度を5つに、牧野幸志は3つに分類して、自己評価、試験、成績などとの関係を分析している[2]。松島るみと尾崎仁美は、新入生を対象に大学進学動機と学習意欲・授業選択態度の関連を分析している[3]。

これらの研究では、どのようなタイプの学生が、どのような授業選択行動を取る傾向にあるのかが明らかにされている。しかしながら、実際の授業選択・履修登録の場面において、学生たちがどのような情報源をもとに、どのような基準で判断を下しているのかについては触れられておらず、臨場感なりリアリティーなりに欠けるものとなっている。

以上より、本稿においては、初年次においてどのような授業を選択するかが初年次教育の重要な要素の1つであるとの前提に立ち、実際に学生がどのような情報源を用いて授業を選択し、履修登録に臨んでいるのかを明らかにする。今回は、筆者にとって最も身近な大阪大学の新入生を対象とし、事例的にこの問題を検討する。そのため第1に、新入生が授業を選択する際に、何を情報源としているのかを明らかにし、第2に、情報源と授業選択の基準の関係を分析する。そして第3に、これらの情報を踏まえて、現状では新入生が得られない情報が何かを考察し、それを提供する方途について検討する。

(2) 研究の概要と使用したデータ

上記の課題を明らかにするために、本稿においては、具体的には以下の作業を行う。

①大阪大学の共通教育科目の受講生データと、学生団体が作成するいわゆる鬼仏表である「クロバス」における授業評価を接続し、前者に対する後者の影響力を分析する。

②新入生を対象としたアンケート調査により、授業選択に際して、シラバス、「クロバス」、知人からの情報をどの程度活用しているのか、これらの活用度と授業選択の基準にどのような関係があるのかを考察する。

③学生からみたシラバスの問題点に関するグループワークの結果から、新入生が授業選択を行うに際して不足を感じる情報を明らかにし、その提供の可能性を検討する。

上記①に出てくる「クロバス」は、通常は口頭伝承かせいぜい学科ないしはクラス単位で数枚の紙に示される学生による授業評価である。それが100頁程度の冊子体になっている。内容の是非はともかく、近隣の店の広告なども掲載されており、なかなか立派な体裁である。たいていの阪大生はその存在を知っており、授業選択の際の資料として広く使われている。そこでは、阪大の共通教育を中心に約500科目の授業がA～Eの5段階で評価されている。その基準は一言でいえば「いかに楽に単位が取れるか」である。Aが最も楽に単位が取れる科目（仏）であり、Eはその対極（鬼）である[4]。本研究においては2008年度版（2007年度開講授業を評価）から2011年度版の4年分の「クロバス」を使用した。

「クロバス」における評価と受講生数の変動との関係を調べるために、この4年分の「クロバス」データに対応する年度の受講生数データを組み合わせた。調査対象とする科目は、教室の収容能力以外に受講人数制限のない教養教育科目（「基礎教養科目」「国際教養科目」「現代教養科目」「先端教養科目」）とした。これら教養教育科目として開講されている授業数に対する「クロバス」掲載授業数の割合（「クロバス」掲載授業数÷全授業数×100）は、2007年度（2008年度版「クロバス」掲載分）が29.6%、2008年度が34.6%、2009年度が33.0%、2010年度が37.3%である。

②にあるアンケート調査は、「新入生の授業選択行動に関する調査」として、新入生が何を情報源として授業を選んだか、選ぶ際の基準は何かを問う質問紙調査である。実施時期は2011年6月で、共通教育の授業時に配布・回答・回収した（6科目で実施）。対象は主として阪大の1回生であり、若干名受講していた上回生には1回生時のことを回答してもらった。回答者数は276名であり、1回生全体の約8％にあたる。（詳細後述）

③にあるグループワークは、大学教育実践センターの前期開講科目である基礎セミナー「双方向型シラバスをつくろう」[5]の授業時におけるグループワークである。テーマはシラバスの問題点や改善点などに関するもので、そこで出された意見等のデータを整理して使用している。

1.「クロバス」の影響力

(1)「クロバス」評価と受講生数

まず最初に「クロバス」の影響力についてみておきた

い。図1は、「クロバス」に記載されている評価別に受講生数の増減を表したものである（D評価とE評価は数が少ないので、まとめて計算した）。各評価別に、前年の受講生数から当該年度（「クロバス」発行年度）の受講生数を減じた数値の平均が示されている。結果は一目瞭然であり、高い評価（＝楽に単位が取れる科目）ほど受講生数が増加し、低い評価（＝厳しい科目）ほど逆に受講生数は減少する結果が出ている。今風の言い方をすれば「美しすぎるデータ」である。

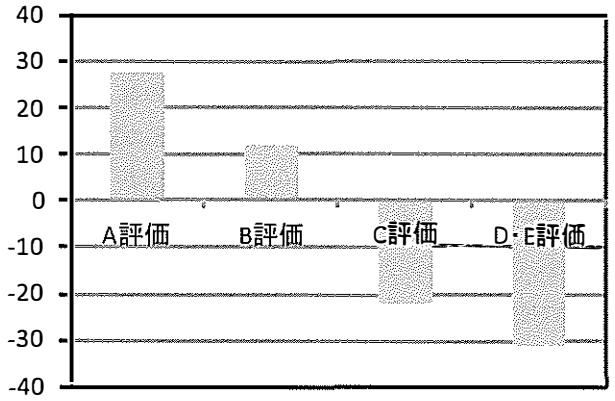

図 1. クロバス評価別の受講生増減の平均（人）

次に、「クロバス」の評価別に受講生数の増減率の内訳を示したのが図2である。「クロバス」でプラス評価（A・B）の授業では受講生が増加した授業が多く、マイナス評価（C・D・E）の授業では逆に減少する授業の方が多くなっている。

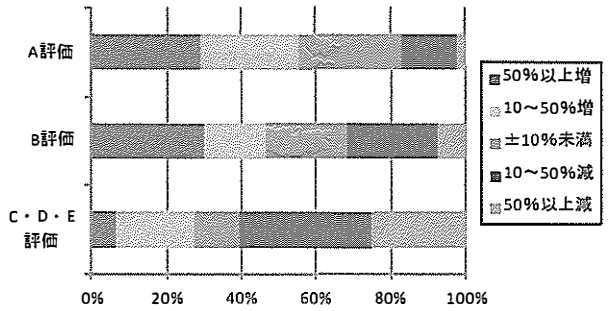

図 2.「クロバス」評価別の増減率

(2)「クロバス」評価とクラス規模

図2から分かるように、A・B評価であれば必ず受講生が増加するというものでもなければ、C評価以下であれば必ず減少するというものでもない。いくつか要因は考えられるが、1つは授業の規模である。教室の収容能力の関係で、最大の教室でも220人が限度であり、原則これを超えるとこれら科目も抽選となる。すなわち、教室の収容定員に既に達している授業では、いくらA評価であっても増加することはない（「飽和効果」）。そこで「クロバス」評価に加えて授業規模別に受講生の増減を見てみると、図3のようになる。ここでも結果は明解である。増加の余地のある授業がA・B評価を受けると、受講生数の増加の割合はいっそう大きくなること、逆に大規模授業がC評価以下になると激減する傾向になることが分かる。

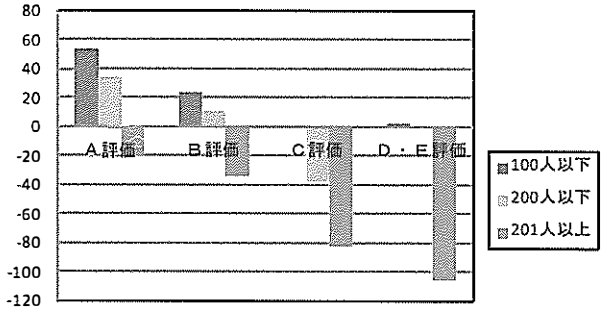

図 3. 評価別・規模別の受講生数の増減

A評価の授業でも、大人数講義においては「飽和効果」によって「クロバス」の効果が弱まる場合がある。他にも教員の自己防衛による影響力の減退も考えられる。受講生が多いとその分負担も大きいので、適切なクラス規模にすべく教員の方も工夫を行っている。1つは教科書の指定である。数千円の教科書を購入することは学生にとっては大きな経済的負担であり、授業内容に強い関心がなければこの点で受講を断念する者もいよう。もう1つは成績評価を厳しくすることである。学生間で単位が取りやすいと評判になれば受講生が増えることを教員も知っているから、受講生が増えて限界に達したところで評価を厳しくし、いわゆる「撃墜王」であるという噂を広める作戦である。ただし、「クロバス」等を介しての効果が発揮されるのは1年後ということになる。

(3) 経年変化

今回対象とした範囲で、連続3年以上「クロバス」に掲載されている常連科目は63ある。このうち、全てプラス評価（A・B）の科目が41、全てマイナス評価（C・D・E）の科目が2、プラス・マイナス双方の評価を含む科目が20となっている。

最後の双方の評価を含む科目について詳しく見ると、上に見た傾向（プラス評価になると受講生が増加し、マイナス評価になると受講生が減少する）通りの科目が7

（図4参照）、傾向に準ずる（増減率等が部分的に傾向から外れている）科目が12、傾向に反する科目が1となっている。唯一の例外科目の事情は知りたいところであるが、常連科目の経年変化をみるに、概して傾向に沿う形になっており、「クロバス」の受講生数変動に対する影響力は大きいと言えよう。

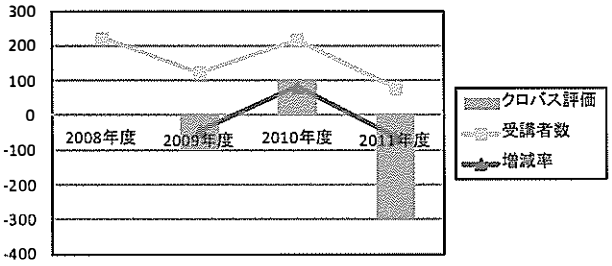

図 4. 傾向通りの科目の一例
※縦軸の数値は受講生数で単位は「人」
※「クロバス」評価はC、B、Eの順

2. 履修の情報源

上に見てきたように、「クロバス」が新入生の履修行動に少なからぬ影響を及ぼしているが、全ての学生が「クロバス」だけに基づいて授業を選択しているとは考えにくい。シラバスや先輩などから得られるの情報も大いに参考になるはずである。そこで、上述の「新入生の授業選択行動に関する調査」により、この点を明らかにしていきたいと思う。

(1) 回答者の属性

調査の概要については序の部分で示したので、ここでは回答者の属性から始めたいと思う。まず学部別の内訳を見ると図5ようになる[6]。経済学部生の割合がやや高いが、阪大全体の学部学生比から大きく逸脱していないとみなして良かろう。学年別では1回生向けの授業で調査したため、1回生が97.5％と大半を占めている。上回生も若干混じっているが、全体への影響はほとんど無いと考えられる。性別では男子69.9％、女子24.6％（未記入5.4％）であり、阪大全体（それぞれ65.7％と34.3％）と比べると女子の比率がやや低くくなっている。

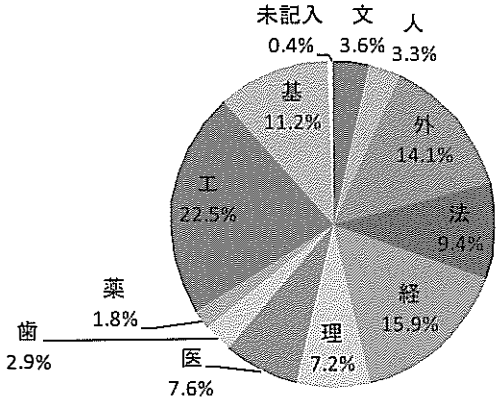

図 5. アンケート回答者の学部別内訳

(2) 情報源の活用状況

上回生の体験談をもとに、阪大生が利用する授業選択・履修の情報源として、「冊子のシラバス」、「KOANのシラバス」（Web上のシラバス）、「クロバス」、「先輩からの情報」、「同級生からの情報」、「その他」の6つを選択肢とした。授業選択の際にこれらをどの程度参考にしたかを百分率で記入してもらった。例えば「クロバス」のみを参考にした場合は「クロバス」欄に「100」、他は「0」を、「冊子のシラバス」と「クロバス」を3：1で参照した場合は「冊子のシラバス」に「75」、「クロバス」に「25」、他は「0」を記入してもらった。主観的な数値ではあるが、大まかな傾向を知るには十分であると考える。

図6は、それぞれの選択肢に記入された数値の平均を示したものである。ここから、阪大の新入生が授業を選ぶ際に主に活用するのは、「冊子のシラバス」と「クロバス」であることが分かる。また、先輩や同級生からの情報もいくらか参照されている[7]。

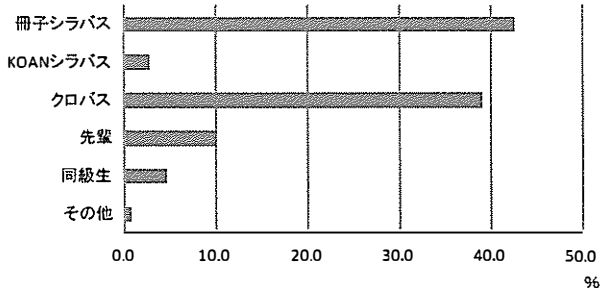

図 6. 情報源の活用度

最も多かったのは「冊子のシラバス」であるが、新入生全員がこれを持っているのに対し、「クロバス」は必ずしも全員が持っていないことを考えると、「クロバス」の力は相当なものかもしれない。ただし、「クロバス」だけで授業を決めた者は全体の2.2％であり、全く使用しなかった者も18.1％に上っている。逆にシラバス（冊子＋KOAN）については、それだけで授業を決めた者が10.0％、全く使用しなかった者が6.3％となっている。

「クロバス」だけで決めた者やシラバスを全く使用しなかった者は、確かに比率としては少ない。ただ、1学年に換算すると、それぞれ約80人と220人いる計算になり、少し考えなければならない数値かもしれない。

(3) 情報源活用の類型

授業選択における阪大生の情報源の活用度は多様である。情報源の活用割合をもとに分類すると、以下の5類型に分けられる。

①シラバス中心（28.1％）…シラバス（冊子＋KOAN）の参照度合が最も高く、2位の情報源の2倍以上となっているグループ。

②クロバス中心（22.6％）…シラバスの参照度合が最も高く、2位の情報源の2倍以上となっているグループ。

③知人中心（4.1％）…知人（先輩＋同級生）からの情報が最も高く、2位の情報源の2倍以上となっているグループ。

④複数情報（44.4％）…上記①～③以外で、シラバス、「クロバス」、知人のうち、2つが1位・2位となっているグループ。

⑤その他（0.7％）…上記①～④のいずれにも当てはまらないグループ。

このように、授業選択の情報源活用には学生間で大きな差がある。また、1つの情報源だけで履修登録する授業を決めている学生はむしろ少数派であり、大半の学生は複数の情報を活用しているのである。

(4) 情報源の使用順

次に、情報源の活用順についてみてみると、最初に使用した情報源として最も多いのは「冊子のシラバス」である。48.9％の学生がまずは「冊子のシラバス」を見ている。しかし、その一方で最初に「クロバス」を見る学生も38.9％に上る。

2番目に使用した情報源としては、両者がクロスする。すなわち、最初に「冊子のシラバス」を用いた学生のうち2番目に「クロバス」を使った者は71.4％、最初に「クロバス」を用いた学生のうち2番目に「冊子のシラバス」を使った者は67.3％である。前者は「内容が良さそうな授業で単位が取りやすいもの」、後者は「単位が取りやすそうな授業で内容が良さそうなもの」を選んだということになろうか。なお、2番目に「先輩からの情報」を用いたとする者は、前者が12.4％であるのに対して、後者は24.8％である。「クロバス」優先の学生の方が先輩を頼る傾向にあり、授業を行う者からの情報よりも、受講者の経験を重視していることがうかがえる。

(5) 授業を選ぶ際に重視した項目

実施したアンケートにおいては、授業（教養教育科目）を選ぶ際に重視した項目について、授業の内容（「内容」）、授業の難易度・レベル（「難易度」）、授業の形式（「形式」）、単位の取りやすさ・成績評価（「単位」）、教員（「教員」）、曜日・時間帯（「時間帯」）の中から順位を付けて回答してもらった（図7）。これらのうち、上位（1位または2位）で考慮されることが多かったのは、「内容」「単位」「時間帯」であった。

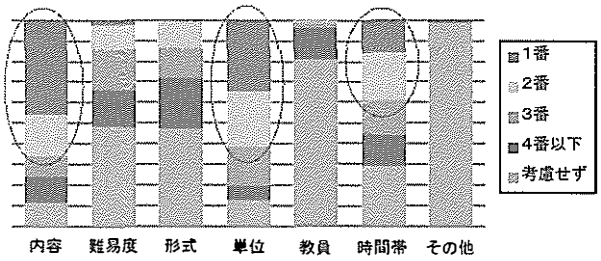

図7. 授業を選ぶ際に重視した順位：全体

これら上位3項目について、情報源活用の類型別に比較したものが図8a～8cである。「内容」を1番に上げたのは、「シラバス中心」で3分の2に上るのに対して、「クロバス中心」では1割程度である。「単位」については、ほぼこの逆の状態にあり、上位に上げた学生は「クロバス中心」では9割を超えるのに対して、「シラバス中心」では3割に満たない。「複数情報」は両者の中間、やや「シラバス中心」寄りの傾向にある。「時間帯」については「内容」や「単位」ほどは類型間で極端な差は見られない。

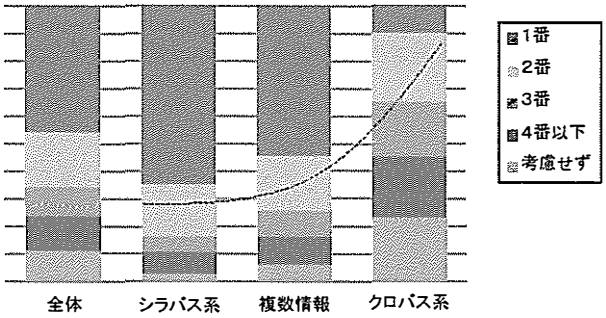

図8a.「内容」を考慮した順位

このように、情報源活用の類型ごとに重視される項目が異なる理由については、学生タイプの違いが情報源の違いを生むことと、情報源の違いが選択基準の差を生む

ことが考えられる。しかしながら、この点は今回の調査では明らかにできないので、今後の研究課題としたい。

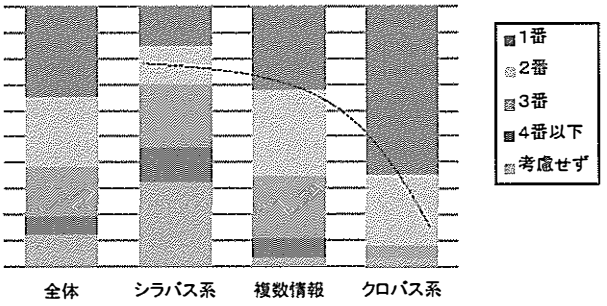

図 8b.「単位」を考慮した順位

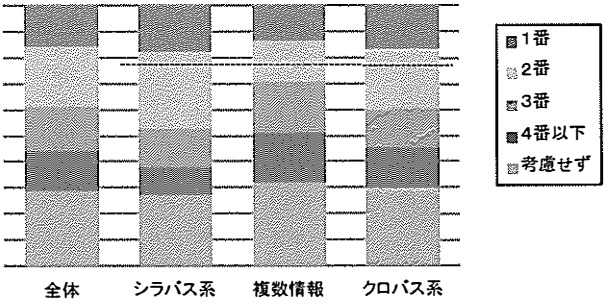

図 8c.「時間帯」を考慮した順位

3. 学生が求める情報とシラバス

ここまでは、新入生が既存の情報源をどう使っているかを中心に分析を行ってきたが、以下においては、学生が授業選択にあたって何を求めているかも視野に入れて論じていきたい。ここでは、基礎セミナー「双方向型シラバスを作ろう」におけるグループワークのデータを手がかりとする。というのも、授業の一環としてシラバスの問題点や改善案について時間をかけて議論しており、そこに学生が授業選択に必要としている情報が見出されるからである。

(1)「双方向型シラバスをつくろう」と「ワニバス」

「双方向型シラバスをつくろう」(前期金曜5限)は1回生向けに開講されている基礎セミナーである。この授業は、「授業や学問の面白さを伝えられる双方向性のあるシラバスをつくれないか」という学生からの提案を受けて、2009年度に開設されたものである。

そこでは、正確ではあるが学生にとって分かりにくいシラバスと、明解で面白いが単位をいかに楽に取れるかが基準の「クロバス」、双方の短所を克服し、長所を併せ持ち、双方向性も有した新しいタイプのシラバスを、受講生が議論と試行錯誤を重ねながら作り上げていくことを目標とした。実践センターのキャラクターである「ワニ博士」に因んで、この新しいタイプのシラバスを「ワニバス」と名付けている。2009年度には27件、2010年には19件の「ワニバス」を試行的に作成した[8]。

(2) 学生から見たシラバスの問題点

上述のように授業においては、「双方向型シラバス」を作成する前段階として、冊子のシラバスの問題点を議論してもらっている。毎年概ね似たような意見が出ているので、ここでは最新の2011年度の議論で出されたを問題点を示すことにする—あくまでも学生の目から見た問題点である。

問題点は、①表記方法に関する問題、②見た目・レイアウトに関する問題、③内容上の問題の3つに分かれる。このうち内容上の問題は核心に関わるものであるので、次節で改めて検討することとし、ここでは最初の2つの問題について示しておく。

表記方法に関する問題は、「抽象的」、「文章が硬い」、「箇条書きの方が分かりやすい」、「字数制限を設けるべき」、「空欄があるのは良くない」、「教員が違うのに同内容シラバスがある」といったことである。最後の分については概論などを複数教員で担当している場合などに、教員側で統一のシラバスを作成することがあるのだが、これが学生の目には不自然に映るようである。

見た目・レイアウトに関する問題は、「分厚すぎる」、「重すぎる」、「学部別に分ける」、「履修登録方法が違う科目は別冊子にすべき」、「字体を優しいものにする」、「カラーまたは2色刷が良い」、「間に線を引いて仕切る」といったものである。予算面も考えてもらうと、なかなか解決が難しいことは理解してもらえるが、不都合は感じているようである。

(3) 冊子のシラバスの内容上の問題

内容上の問題としては、①シラバス内で解決すべきもの、②「クロバス」に回すべきもの、③「双方向型シラバス」で取り上げるべきものに分けられる。上にも述べたが、以下に示すのは学生の率直な目から見た問題点ないしは不十分な点であり、教員の目からはいささか不適切なものも含まれているが、ここではその是非についての吟味は行わないこととする。

①シラバス内で解決すべきもの

これは、必要なのに掲載されていない（不十分な）情報と、今は掲載されているけれど不必要な情報とに分けられる。学生が問題点として上げたうち、前者は「教科書・参考文献情報」、「成績評価方法」、「定員」、「希望登録の有無」である。最初の2つは現行シラバスにも記載されているので、不十分ということであろう。後者は、「全部英語のシラバス」、「英文タイトル」、「授業コード」、「『KOAN参照』という記述」である。英語に関する批判については、教員の立場からは疑問を感じるが、1回生の日本人学生の多くには不要なものと映るようである。

②「クロバス」に回すべきもの

これに該当するのは「授業のレベル（単位の取りやすさ）」である。ただし、「レベル」が望まれる履修条件（高校で○○を履修していること、前期に「○○学」を履修していること等）という意味になれば、「双方向型シラバス」ないしはシラバスの対象ということになろう。

③「双方向型シラバス」で取り上げるもの

これには以下の事柄が該当すると思われる。すなわち「教員情報」、「学生の声」、「授業形態」、「前年度受講生数」、「対象とする受講者」、「キーワード」、「他の授業との関連」、「オフィスアワー欄」、「連絡先アドレス」、「前年度合格者数」である。

このうち、最後の「前年度合格者数」については、単位の取り易さとも関係するので、「クロバス」で取り上げてもらうのが適切のようにも思える。逆に、「キーワード」、「他の授業との関連」、「オフィスアワー欄」、「連絡先アドレス」などはシラバスに記載しても良いような事柄である。

(4)「双方向型シラバス」（ワニバス）の可能性

中間的な事項をどちらで取り上げるのが適切かについてはひとまず保留するとして、仮にこれらを全て「双方向型シラバス」で取り上げるとした場合の話をしたいと思う。まず最初に注目したいのは、「教員情報」、「学生の声」、「オフィスアワー欄」、「連絡先アドレス」である。最初の2つは「双方向型シラバス」上での情報交換、後の2つは学生と教員が直接コンタクトできる情報の提供という意味で、双方向性を促進する要素を持った事柄といえる。

次に、「キーワード」、「他の授業との関連」、「オフィスアワー欄」、「連絡先アドレス」に着目しよう。これら4つの事項は、いずれも自発的な学習や発展的な学習に活用できるものであり、今問題になっている授業時間外の学習時間の少なさの解消に一役買うのではないかと期待される。

最後に、「教員情報」、「授業形態」、「対象とする受講生」をみてみよう。これらは上述のアンケート調査で、授業を選ぶ際の項目として相対的に考慮されなかった「教員」、「授業の形式」、「授業の難易度・レベル」にそれぞれ対応するものである。もし、これらの事柄が、情報不足のために考慮できなかったのであるとすれば、それを提供できる貴重な情報源となる。これら項目が学生のグループワークから上がってきたことを考えると、決して関心がなかったから考慮されなかったのではないように思われる。

このように、開発途上の「双方向型シラバス」には、シラバスや「クロバス」で得にくい情報を提供できるというメリットがある。「双方向型シラバス」で措置すべきもので、特に有益と思われるものは、学生と教員の「双方向型シラバス」上および「双方向型シラバス」外でのコミュニケーションを促進するツール、そして、自発的学習を促進するツールである。これらの要素を「双方向型シラバス」にいかに上手く組み込んで開発するかが今後の課題となる。

結

毎年4月には、予め時間割が決まっている高校とは異なり、自分で授業を選ばなければならない大学の仕組みに多くの新入生が戸惑っていることであろう。短期間に限られた情報の中から、学生たちは授業を選んでいく。

その際に、個人差はあるが、単位が取得できるかどうかは重要な要素となる。学生にとって卒業は最重要事項であり、単位が気になるのは仕方ないことである。学問的要素を優先する教員との間にズレがある。本稿でみてきたように、多くの学生は、いきなり異なる環境に放り込まれた中で、多様な情報源を駆使して最適の時間割を組もうとしている。そのような需要から「クロバス」は生まれ、阪大生の多くに支持されているのであろう。

もちろん、「クロバス」は相当な影響力を持っているが、それが全てではない。ある者は内容を重視し、ある者は単位取得を重視している。しかし、多くの学生は「クロバス」もシラバスも参照している。ここにホンネとタテマエの間で揺れる学生の姿があるとみることもできる。学生たちは、様々な情報源を駆使して自分にとって最適な選択をしようと試みている。良く言えばバランス

感覚があるということになるのかもしれない。内容重視だからシラバスを選んだのか、シラバスだから内容重視にならざるを得ないのかは、本研究からは分からないので、この点に関しては稿を改めて検討したい。

ただし、現状では様々な情報源を駆使しても、学生は欲しい情報を全て得ているわけではない。考慮した項目の中で上位に上げられることの少なかった「教員」や「形式」などは、基礎セミナーでのグループワークでは、現行シラバスに不足している情報としてあげられており、この種の情報について需要があることが分かる。したがって、これらの事柄に興味がなかったというよりも、知る由がなかったと考えることができる。

学生と教員の双方向性だけでなく、このような情報需要の点からも「双方向型シラバス」の需要はあるのではないかと考えられる。必要な情報を提供することで、より適切な履修行動が取られることを期待したい。もちろん、そのためには情報を整備すれば済む話ではなく、適度な指導も必要になってくるであろう。この点についても、「双方向型シラバス」開発と平行して検討していきたい。

註

1) 平野眞「大学授業に対する学生の『好み』の分析」『大学教育学会誌』第22巻第1号（2000年）。
2) 三宅幹子「大学生における授業選択態度のタイプと自己評価、授業選択態度、及び成績の関係」『広島大学教育学部紀要（第一部心理学）』48（1999年）、牧野幸志「大学生の一般的授業選択態度と成績の関連（1）―一般的授業選択態度のタイプわけ―」『高松大学紀要』36（2001年）。
3) 松島るみ・尾崎仁美「大学進学動機と学習意欲・授業選択態度の関連―新入生を対象として―」『京都ノートルダム女子大学研究紀要』第35号（2005年）。
4) 教員や授業に対するコメントも付いている。なかなかウィットに富んだものも多く、学生の観察力の鋭さに思わず笑う事もある。
5) 担当教員は服部憲児・中村征樹で、受講者数は2009年度が19人、2010年度が22人、2011年度が15人となっている。
6) 図5中の「人」は人間科学部、「外」は外国語学部、「経」は経済学部、「基」は基礎工学部を意味している。
7) 「その他」に記載された主な情報源としては、インターネット上の講義情報（KOANを除く）が5件、時間割表が3件となっている。ガイダンス室の利用も1件あった。ガイダンス室では、学部3・4回生や大学院学生が「ラーニングアドバイザー」としてガイダンス室に待機し、授業で分からなかったことや、専門課程での学習や大学院進学のこと等について相談や会話ができるようになっている。
8) 2011年度版については本稿執筆時点で作成中である。過去に作成したワニバスの一部は、大阪大学大学教育実践センター学生参加型FD推進委員会編『「パンキョー革命」「ひとこといちば」「ワニバス」報告書（2010）』（2011年）に収録されている。下記からダウンロード可能である。
http://www.cep.osaka-u.ac.jp/ourwork/withstudents/pankyo

謝辞：データを提供いただいた教務係、アンケート実施に協力いただいた授業担当教員、■答に協力してくれた学生諸氏、面倒なデータ入力作業を手伝ってくれたアルバイトの皆さんに、記して御礼申し上げます。

（はっとり　けんじ　大学教育実践センター
FD推進部門・准教授）